

平成 22 年 5 月 14 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20820021
 研究課題名（和文） 国際美術シーンにおける日本的アイデンティティの形成：戦後の日米美術交流を中心に
 研究課題名（英文） A Study on Post-WWII US-Japan Art Exchange and the Construction of Japanese Cultural Identity in the International Art Scene
 研究代表者
 池上 裕子（IKEGAMI HIROKO）
 大阪大学・大学院人間科学研究科・特任助教
 研究者番号：20507058

研究成果の概要（和文）：研究期間中、精力的に研究テーマについて調査を行い、学会や国際シンポジウムでの発表を行った。ニューヨーク近代美術館等での調査を行い、対米生活の長い作家達にインタビューを行った。成果の一部を2010年度の『コンフリクトの人文科学』というジャーナルに発表予定である。また、2010年9月に刊行される単著、『The Great Migrator: Robert Rauschenberg and the Global Rise of American Art』の一章においても日米美術交流について論じている。

研究成果の概要（英文）：I conducted an extensive research on this theme during the tenure of this fellowship, while presenting a paper in a number of conferences. I did research at the Museum of Modern Art Archives and interviewed Japanese artists living in the city. An essay on this topic will be published in *Conflict Studies in the Humanities* in 2010, and one of the chapters in my forthcoming book, *The Great Migrator: Robert Rauschenberg and the Global Rise of American Art*, will be discussing the issue of US-Japan art exchange.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,050,000	315,000	1,365,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,250,000	675,000	2,925,000

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：現代美術、日米美術交流、グローバリゼーション

1. 研究開始当初の背景

(1) 戦後アメリカ美術の国際的受容について論じた博士論文の中で、日本の前衛美術家がどのようにアメリカ美術の台頭と向き合ったかについて論じた。その過程で、国際的

美術シーンが持つ政治力学の中で日本の作家が活躍するためには、独自のイメージ戦略が必要になることが明らかになった。欧米中心的な国際美術シーンの中で、非欧米系の作家が活躍するためには、何らかの形で自らの文化的出自をアピールしたり、それを作品に

取り入れたりするといった作業が必要になり、また美術市場もそれを要請するからである。こうして、博士論文執筆の過程で得た見地から、戦後日本美術の対外的アイデンティティの形成について注目するようになった。

(2) 戦後日本美術の対外的アイデンティティ形成にあたって、最も重要であったのは戦後日米の美術交流である。というのは、第二次世界大戦後の文化冷戦において、日本美術はしばしば外交手段としてアメリカの主要な美術館で展示されたからだ。このトピックについて、筆者は2007年に論文発表しており、具体的にはニューヨーク近代美術館で1954年に展示された日本建築について考察した。その際にアメリカ側の資金提供を行ったのはジョン・D・ロックフェラー3世であったことから、彼が主導して実現させた1953年から54年にかけてアメリカを巡回した日本の古美術展についても調査を行った。だが調査の過程で、現代美術に関してはほとんど研究されていないことが明らかになった。また、美術シーンの国際化という観点から日本現代美術を考察する包括的な研究も存在しなかったため、本研究の課題として取り上げることにした。

2. 研究の目的

(1) 第二次世界大戦以降の国際美術シーンの展開を、文化的アイデンティティの役割という観点から歴史的・批判的に検証する。主な考察対象として戦後の日米美術交流を取り上げ、日本美術がアメリカで展示された経緯や、その受容について分析する。その際、しばしば展示の舞台となったニューヨーク近代美術館や、資金を提供したジョン・D・ロックフェラー3世についてもアーカイヴ調査を行う。アーカイヴ調査を通じ、文化外交の手段として利用された美術が、実際にはどのように歓迎、あるいは批判されたかを検証していく。

(2) 海外、主にアメリカで活躍した日本人作家の活動を分析し、戦後の美術交流における日本の対外イメージについて考察する。主な考察対象としてはロックフェラー3世財団の奨学金で渡米した篠原有司男、照屋勇賢や、対米生活の長い杉浦邦恵、中川直人などを予定した。また、国内でもアメリカでの展示経験がある作家に聞き取りを行う。こうした聞き取りを通じて、個々のケースから国際美術シーンにおける日本人アーティストの戦略、文化的アイデンティティの役割を浮かび上がらせ、アーカイヴ調査の結果と相補う働きをさせる。

3. 研究の方法

(1) ニューヨーク近代美術館やロックフェラー財団のアーカイヴにおける未公開資料の調査。ニューヨーク近代美術館のアーカイヴには「The New Japanese Painting and Sculpture」展に関する資料が残されている。また、ロックフェラー財団にはロックフェラー3世の日記を含め、彼の日米文化交流に関する草稿などが残されている。戦後の美術研究に関しては、アーカイヴ資料を網羅する実証的な研究はまだ数少ないことから、本研究は可能な限り一次史料を掘り起こすことを重視して進めていく。

(2) 海外で活躍した日本人作家への聞き取り調査。聞き取りはオーラル・ヒストリーの方法論を用いて行う。オーラル・ヒストリーとは、特定の問題にしばって聞き取りを行う通常のインタビューとは異なり、生い立ちから現在までの活動を包括的に聞いていくものである。本研究の場合は、語り手の美術との関わりを中心に、ライフ・ヒストリーを聞き取っていくことになる。筆者は「日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ」という非営利任意団体の副代表を務めており、この団体と連携して聞き取りを効果的に行う。

4. 研究成果

(1) ニューヨーク近代美術館やロックフェラー財団のアーカイヴで未公開資料を収集した。また、ニューヨーク市立図書館では日本美術の展覧会に関する展評などの調査を行った。調査の結果、戦後の日米美術交流は主にロックフェラー3世が描いた青写真に基づいて推進されたことが分かった。中でも古美術展は、太平洋戦争時の敵国というイメージから、文化立国のイメージを国外に印象づけるのに効果的な役割を果たした。このことは、ロックフェラー3世財団が資金を提供して行った、古美術展を訪れた観客に対するアンケート結果を調査したことで明らかになった。

(2) それに対して、ニューヨーク近代美術館が主催してアメリカ各地を巡回した現代美術展のほうは、あまり評価が芳しくなかったことが明らかになった。特に、比較的好意的な反応を示したサンフランシスコよりも、ニューヨークでの評判が悪かったことが調査の結果分かった。これについては、ニューヨーク中心主義的な戦後の国際美術シーンの政治力学によって、日本の現代美術がアメリカのモダン・アートの亜流と見なされてしまったという分析が可能である。それを裏付けるために、新聞や美術雑誌などに掲載された

展覧会評などを収集した。

(3) 滞米作家へのインタビューを行った。聞き取りを行ったアーティストは篠原有司男、杉浦邦恵、照屋勇賢、桑山忠明、中川直人など。これらの作家のアメリカとの関わりや、作家活動はそれぞれ違うものの、現代美術の中心地であるニューヨークで、日本から移住してきた作家達がどのように生計を立て、作家として認知されていくか、という共通の問題について語ってくれた。これらのインタビューは「日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ」のホームページで公開されており、日本の現代美術に興味のある研究者や一般の読者に広く提供されている。

(4) 調査結果を国内外の学会やシンポジウムで発表した。主なものに2008年8月に大阪大学とサンパウロ大学の共催で開かれた国際シンポジウムや、2009年5月に京都大学で開催された美術史学会全国大会、また2009年10月にスミソニアンアメリカ美術館で開催された国際シンポジウムがある。前者の二つの発表については、その内容を論文として大幅に書き直したものが『コンフリクトの人文科学』という学術誌に今年度掲載される予定である。また、スミソニアンアメリカ美術館での発表も、論文として書き直したものが共著としてスミソニアン学術出版会から今年度刊行されることが決まっている。

(5) 2010年9月刊行予定の単著、『The Great Migrator: Robert Rauschenberg and the Global Rise of American Art』の一章においても日米美術交流について論じた。具体的には、1964年に来日したロバート・ラウシェンバーグと、それ以前に彼の作品のイミテーションを制作していた篠原有司男の交流を分析した。その結果、当時の国際美術シーンにおける不均衡な力関係の中では、「真に対等な美術交流」というものは存在しがたく、その与件の中で篠原が「イミテーション」という要素を戦略的に用いていたことが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5件)

- ① 池上裕子 「ポスト・コンフリクトの日米美術交流」、『コンフリクトの人文科学』、査読有、第3号、2010、in press
- ② 池上裕子 「ROCI プロジェクトにおける現代美術のグローバル・モデルとその功罪」

グローバル COE 中間報告書『交錯するアート・メディア』、査読無、2010、pp. 85-93

- ③ 池上裕子 「世界美術史の見地から戦後アメリカ美術の台頭を考える」、『美術史論集』、査読無、第10号、pp. 31-47
- ④ Hiroko Ikegami, Seth McCormick, Reiko Tomii et al, "Exhibition as Proposition: Responding Critically to *The Third Mind*," *Art Journal*, 査読無、No. 68, 2009, pp. 30-49
- ⑤ 池上裕子 「巴里のアメリカ人：イリアナ・ソナベンド画廊の市場戦略」、『西洋美術研究』、査読有、第14号、2008、pp.106-120

〔学会発表〕(計 6件)

- ① 池上裕子 「ロバート・ラウシェンバーグと現代美術のグローバル化」、招待講演、2009年12月5日、原美術館
- ② 池上裕子 「オーラル・ヒストリー・アーカイヴの構築と利用の実践」、シンポジウム「オーラル・アート・ヒストリーの可能性」、2009年11月14日、国立国際美術館
- ③ 池上裕子 「ROCI プロジェクトにおける現代美術のグローバル・モデルとその功罪」、第60回 美学会全国大会、2009年10月12日、東京大学
- ④ Hiroko Ikegami "ROCI in East: Considering Rauschenberg's Agency in China," International Symposium, "East-West Intersections in American Art," October 2, 2009, Smithsonian American Art Museum
- ⑤ 池上裕子 「戦後の国際美術シーンにおける日本美術の展開とジョン・D・ロックフェラー3世の役割」、第62回美術史学会全国大会、2009年5月24日、京都大学
- ⑥ 池上裕子 「ポスト・コンフリクトの日米美術交流」、International Conference "Migration and Identities: Conflict and the New Horizon," 2008年8月24日、大阪大学中之島センター

〔図書〕(計 2件)

- ① Hiroko Ikegami *The Great Migrator: Robert Rauschenberg and the Global Rise of American Art*, The MIT Press,

2010, in press

- ② Hiroko Ikegami, et al. *A Long and Tenuous Relationship: East-West Intersections in American Art*, Smithsonian Institution Scholarly Press, 2010, in press

[その他]

ホームページ等

<http://www.oralarthistory.org/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池上 裕子 (IKEGAMI HIROKO)

大阪大学・大学院人間科学研究科・特任助教

研究者番号：20507058